

平成23年8月10日
パリ産業情報センター
酒井 裕史
ピエリック・グルニエ

一般調査報告書

フランスにおける最近のバカンス事情

夏です。フランスの夏といえば、バカンスの季節です。知り合い同士のちょっとした会話のなかでも必ず「この夏のバカンスの予定は？」と尋ね合うのが、お決まりになっています。

日本の皆さんも「バカンス」という言葉はもちろん御存知ですよ？日本語では「休暇」と訳されているこのバカンスという言葉自体、もともとれっきとしたフランス語です。ただ、この「休暇＝バカンス」という言葉のイメージについては、私たちフランス人と皆さま日本人との間で大きな違いがあると思います。

そもそもフランス人にとってのバカンスは、休暇を意味する以上に「旅行に出かけること」を意味します。そして、ほぼ欠かせない重要な年中行事です。私たちフランス人は日頃は淡々と働き、日本のように仕事帰りに同僚との飲み会に行くことはあまりありません。しかし、バカンスとなると目いっぱい楽しみます。例えば夏のバカンスに出掛ける人のその「バカンス期間」で最もポピュラーなのは2週間です。3週間あるいは4週間のバカンスに出掛ける人も少なくありません。この長期休暇中にヨーロッパ中を車でドライブして廻る人もいますし、遠く南アメリカやアジアに行く人もいます。大好きなスポーツをして過ごす人もいますし、あるいは逆に海やプールサイドでまったく何もしないで過ごす人もいます。ともかく、他の生活出費を抑えてもバカンスには必ず出掛ける、というのがフランス流です。そのため、「フランス人はバカンスのために働いている」、「フランス人は次のバカンスをどのように過ごそうかを常に考えている」とさえ言われています。

しかし、私たちフランス人のバカンスにも、日数や行き先、あるいは活動の内容などにおいて、その時々流行や傾向があります。そこに、フランス社会のありようの変化を見ることもできるかもしれません。

そこで、今回の一般調査報告書では、私たちフランス人にとってのバカンスの「意味」と近年の傾向について報告したいと思います。

1 フランスにおけるバカンス事情

(1) フランスにおける「バカンス」とは

そもそも、バカンスとはどのように定義されるのでしょうか？国連の専門機関の一つである世界観光機関が定義するバカンスは「4泊以上のプライベート旅行」とのことです。なので、今回の報告書もこれに準ずることにしてい

ます。

それでは、フランスでは今年、どれくらいの人がバカンスに出かけるのでしょうか？バカンスに出かけるフランス人の割合は、統計が始まった1965年の42%から徐々に高まって90年代後半には66%に達しましたが、その後緩やかな減少傾向にあり、2010年には53%まで落ちていました。そして、2011年7月の調査によると、今夏は55%に少しだけアップしそうだとのこと。

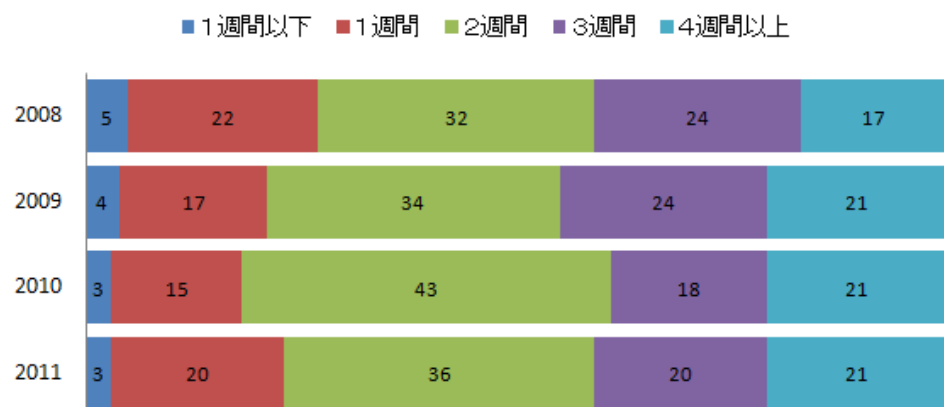
この減少傾向の背景には、経済の低成長が続く一方で、エネルギー、食料品、子どもの学費などの物価が少しずつ上がっていることがあるものと考えられています。また、2008年以前の調査では、バカンスの予算を抑える方法としてバカンス中の遊びや外食に関する費用を犠牲にしていたフランス人ですが、宿泊費や物価が高騰していることを背景に、2009年以降は目的地までの交通費、泊数といったバカンスの「根幹的な」費用を削減するようになっているとのこと。

(2) バカンスの日数について

次に、フランス人がバカンスに出掛ける日数を見てみましょう。下表は今年の夏のバカンスの予定についてのアンケート結果をまとめたものです。最も多いのは「2週間」で、全体の36%に及びます。短めのバカンスである「1週間」と

ちょっとだけ長めのバカンスである「3週間」はともに20%です。さらに、日本の方には想像できないかもしれない「4週間以上」と

夏バカンス合計期間



いう人が21%もいます。日本では一般的と思われる1週間未満、という人はたったの3%です。

しかしながら、近年においては夏のバカンス日数には減少傾向があるようです。これについては、バカンスに出掛ける人自体の減少傾向理由(経済的理由)と重なりつつ、さらにバカンスの取得時期を分散させる傾向があることも原因になっていると考えられています。つまり、「秋休み」(日本にはありませんね)や冬休みにもバカンスに行く分、夏のバカンスを短めにしようとする傾向です。

<参考 フランスの有給休暇について>

フランスでは、年間5週間の有給休暇を取る権利が法律で認められています。さらに週35時間労働制が導入された2002年以降は、週当たり労働時間について

35時間を超えたままとする代わりに、有給休暇日数を増やした職場も多く、実際は年間5週間以上の有給休暇を持つフランス人が少なくありません。また、ほとんどのフランス人がこの有給休暇を全部使います。(日本のように使い残すことはありません。)結果として、フランスでは7月の中旬から8月の下旬の間、多くの工場で2~3週間生産を完全に休止するケースも少なくありません。こうして、経営者からオペレーターまで、みんなで長期休暇を楽しむのです。(この間、フランス全体が停止状態に近いと言っても過言ではありません。)大統領及び政府関係者でさえ、2週間程度の夏休みを取ることが普通です。

ちなみに、フランスの学校の夏休みは7・8月の全部、まるっと2か月です。日本の学校のように部活もありません。さらにフランスの学校には、秋休みに当たる時期(10月下旬)に10日間、クリスマス休暇に2週間、冬休み(2月)に2週間、さらに春休みに当たる時期(4月中旬)に2週間の休みがあります。これら学校の休業日に合わせてバカンスに出かける家族もたくさんいます。

(3) バカンスの予算について

上述の日数調査と同じアンケートでは、バカンスにかかる予算についても聞き取りをしています。これによると、2011年夏のバカンスの予算は、平均で1,948ユーロになるものと推測されています。ここ数年の傾向をみても、多少変動はあるものの、だいたいこの程度の金額で安定しているようです。

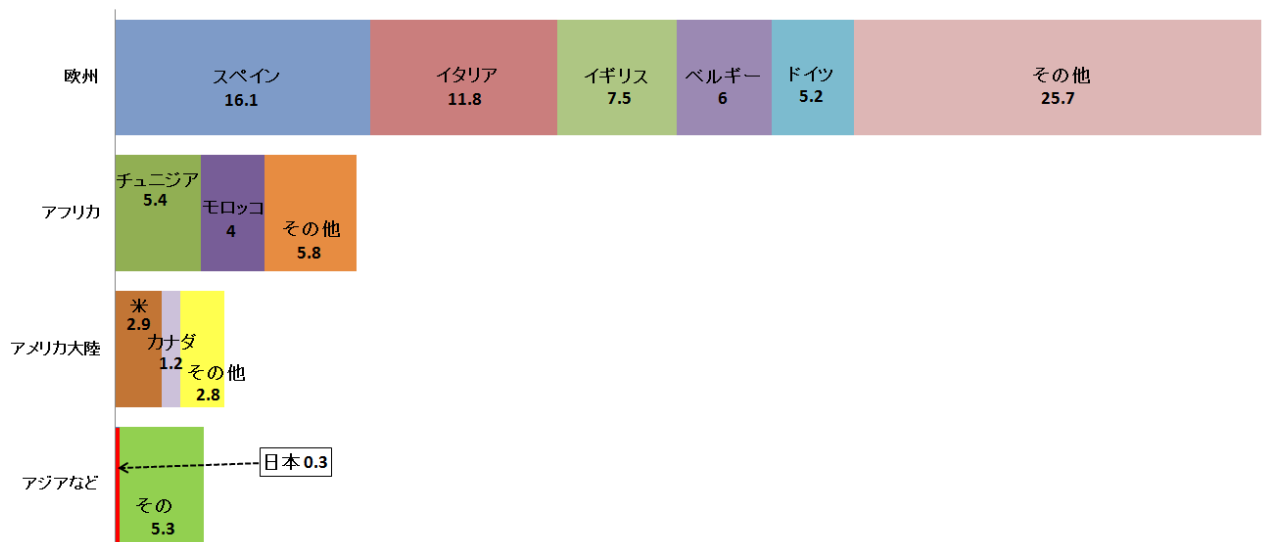
先にも少し触れましたが、予算全体に大きな変化がないなかでバカンスの泊数や交通費が減っていること背景には、宿泊費やガソリンをはじめとする物価の上昇があり、つまり、同じ金額を用意しても、日数や出掛ける距離を減らさないといけなくなっている、ということです。

2 フランス人のバカンスの行き先について

(1) 国外旅行

バカンスの行き先についての2010年の実績を見ると、総旅行数に対して国外旅行が占める割合は11%です。この割合は近年において微増傾向にあるようです。国外旅行の行き先の第1位はやはりヨーロッパ諸国で、全体の72.3%を占めています。(気軽に車でも行けますからね。)次に人気のある訪問先はアフリカ諸国で、15.2%を占めています。アフリカの人気

海外における目的地の内訳(%)



が高い背景には、旧宗主国としてのつながりがあることでフランス語が通じること、アフリカ系フランス人が少なくないこと、などの事情があるようです。3番目にはアメリカ大陸(北米・中米・南米の全て)で6.9%です。アジア・オセアニア地域は5.6%と最も少なかったのですが、前年比で5.2%の成長を示しています。

宿泊日数は移動距離に比例する傾向が顕著で、ヨーロッパ諸国での平均宿泊数は7.6泊、アフリカ大陸は11.9泊、アメリカ大陸は15.7泊、アジア・オセアニアは15.4泊となっています。なお、国外旅行全体の平均は9.47泊となっています。

※ なお、フランス人にとっては、アフリカの中でも特に北アフリカ諸国(モロッコ、チュニジア、エジプトなど)が人気の訪問先になっています。これには、歴史的なつながりの濃いこと、フランス語が通じること、物価が安いこと、地中海性気候で天候もよいリゾート地であることなど、さまざまな理由があります。しかし、今年はじめからのテロ事件や内政的な混乱のため、今夏は訪問者数が減り、しばらくの間は国内、またはヨーロッパを訪問する人が旅行の数が増えるだろうと指摘されています。

※ 2002年以降、対ドルのユーロ高が進んだ結果、ヨーロッパ外の外国への旅行費用が大きく下がりました。一方で、ユーロ導入以降のフランスの物価上昇率が高かったため、国外旅行の方がフランス国内の旅行よりも安価になる現象が起きています。(日本も同じですね。)ただし、現在の日本は著しい円高になっているので、やはり「高価」なバカンスになってしまいます。

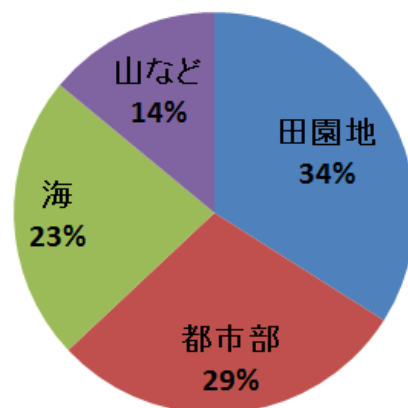
(2) 国内の内訳

フランスにおけるフランス人の国内旅行全体の平均泊数は5.36泊であるとのことですが、この泊数についても、訪問先等によってかなりの違いがあります。

フランスで最もポピュラーな国内旅行は、内陸部の田園地域(カンパーニュ)を訪ねる旅です。国内旅行全体の約34%を占めるそうです。都市部に住む市民の多くはマイカーに自転車などを積んで一気に田舎に向かい、そこできれいな空気と大自然の風景を楽しむのです。ちなみにこのような「カンパーニュ旅行」の平均の宿泊数はだいたい5泊であるとのこと。

次に人気なのは、都市旅行で約29%を占めています。フランスでも夏は各都市でさまざまなイベントやお祭りが開催されます。このイベント目当てにフランス中からたくさんの方が各都市を訪問するのです。やはり特定の目的があった旅行であり、また宿泊費も比較的高額なためか、平均の泊数はだいたい4泊で最も短いです。

国内旅行の内訳



3番目に人気なのは海への旅行で、約23%を占めています。日本と同様、子どもも楽しめる夏休み定番の訪問先ですね。フランスの夏は普通、25～30度なので強烈に暑いなどということはなく、かなり過ごしやすいですので、朝から晩まで海岸でゆっくりする人が多いです。また、ビーチ近くにはキャンプ場が設けられていることも多く、そこにキャンプしながら滞在する人たちも少なくありません。この海への旅行の滞在期間が最も長く、8泊程度が平均であるとのこと。

3 最近のフランスのバカンスの傾向について

フランスのバカンスも、少しずつ変化しています。その変化の傾向にもフランスらしさがあります。

(1) 「安・近・短」化の傾向

先にも触れましたが、国内旅行が比較的高くつくようになったため、フランスのバカンスにも「安・近・短」化の傾向が見られるようになりました。つまり、①旅行日程を1日～2日間程度短くする、②宿泊費を圧縮する、③比較的近い目的地を選択する、などです。このうち、宿泊費を圧縮する方法については、親族の家に泊る(33%)、友人の家に泊る(9%)、キャンプする(14%)などがありますが、このほかに近年特に「ブーム」になっているのが、「民宿」での宿泊です。「民宿」と書きましたが、フランス語ではシャンプル・ドットと言い、日本の「ペンション」のようなイメージです。

(2) 持続可能なバカンスも

環境への関心が高まっていることで、「持続可能なバカンス＝エコ・ツーリズム」、つまり自然に囲まれて過ごすスタイルのバカンスも脚光を浴びています。このようなスタイルのバカンスには、例えば、①自然の豊かな地域でサイクリングやトレッキングなどをして過ごす、②自然食品などを使った料理を教わったり味わったりしてゆっくり滞在する、などがありますが、さらに一歩進んで、③農場で農家の仕事を手伝いながら過ごす、ものもあります。(日本でも「グリーン・ツーリズム」と呼ばれていますね。)

また、環境への負担を気にして、なるべく二酸化炭素を出さないようにするためにバカンス先を比較的近距离なところに変えた、という人も増えていますし、地域経済に貢献する方を選択して自宅から近い街・村で過ごす、というスタイルもポピュラーになりつつあるようです。

(3) ローカル観光の象徴「シャンプル・ドット」

先にも少し触れましたが、シャンプル・ドットはフランス風「民宿」です。バス・トイレは各部屋にそれぞれ付いていていわば「独立」している一方で、朝食、夕食にはオーナーと宿泊者が同席し、会話と料理をともに楽しむのが一般的です。また、部屋の内装に地域性やオーナーの趣味を反映させることも多く、ローカル観光の象徴的な存在です。比較的低価格(朝食込の2人用部屋の1泊平均価格は54ユーロとされています)であり、これも魅力の一つと言えるでしょう。

近年の自然志向、地方志向の高まりと相まって、このシャンプル・ドットの人気が急上昇中です。おかげで、過去20年間でシャンプル・ドットの数 は341%増という急激な伸びを記録しています。日本と同様、地域の活性化が課題になっているフランスにおいて、シャンプル・ドットはそのためのツールの一つとして期待されています。

4 おわりに

フランスにおいて1930年代に現れた有給休暇は、当初は年間2週間だけでしたが、50年代に3週間、60年代に4週間、80年代には5週間にまで伸びました。この有給休暇の拡大に伴ってバカンスの習慣が普及し、フランスの観光業も飛躍的に発展しました。この観光業の発展は国内旅行者だけでなく、外国からの旅行者をも魅きつけ、2010年には7,680万人もの外国人がフランスを訪れており（これはフランスの全人口を超えた数です！）、フランスを世界一の観光大国にしています。経済効果も非常に大きく、旅行代理店、宿泊施設、外食施設、レジャー施設、交通機関などの観光関連産業全体において約463億ドルの経済効果があったものと言われています。

多くの観光客を受け入れることにより、大きな経済効果が得られることはもちろん、自国の文化を広く世界に発信することもできます。この観点から、日本においても外国人を対象にした観光客誘致事業「ビジット・ジャパン・キャンペーン」が実施されています。

日本を訪ねるフランス人観光客は2010年時点で約15万人であり、全体の1.75%に過ぎませんが、実は過去10年間に倍増しています。（一方で、先の表で挙げたとおり、夏のバカンス先として日本を訪問するフランス人は未だ全体の0.3%に過ぎません。）もともと日本の伝統的文化がフランス人にとって魅力的だったことに加え、近年は漫画やアニメ、ゲームなどのポップカルチャー、ファッション・デザインなどのモダン・カルチャーが若者層を中心に支持を集めていることから、全体として日本に関心を持っているフランス人は増加傾向にあると言えます。実際、フランス人による日本旅行の動機を大まかに整理すると、次のようなものがあるようです。

- ・ 伝統文化（祭り、日本庭園、茶道、着物、盆栽など）
- ・ 伝統的な建築物（寺や神社、城など）
- ・ ポップカルチャー（漫画、アニメ、コスプレ、テレビゲームなど）
- ・ モダンデザイン（現代建築、現代アートなど）
- ・ 自然（山、温泉など）
- ・ 日本食

日本の魅力を世界に発信することと観光客の誘致を進めることは、相互に促進し合う関係にあります。もちろん、愛知県にも魅力的な観光資源がたくさんあり、特に産業観光という観点では他地域に類を見ない豊かさを誇っています。愛知県パリ産業情報センターとしても、今後もさまざまな機会を捉えて、観光地としての愛知県の魅力を発信していきたいと考えています。